

社会福祉  
社会保障  
は、いま  
18

認知症の数値目標

認知症は、病気のために記憶力や判断力が低下して、日常生活や社会生活が不自由になることを言います。認知症は、高齢化と共に発症率も高くなります。症状も多様で、かつ個別的です。進行を遅らせる薬はあるものの、完治できる治療法は見つかっていません。

政府はことし5月、認知症に対して初めての数値目標を公表しました。それによれば、団塊の世代がすべて75歳以上（後期高齢者）になる、2025年までの6年間に認知症を6%減少させるといふものです。今までは、認知症施策推進総合戦略（新オレンジプラン）において、認知症になっても地域で安心して暮らせる「共生」を重視してまいりましたが、新たに「予防」を組み入れ、重点を2本柱にするというものです。

「予防」の在り方を研究することに異論がないのは当然ですが、財政問題と併せて認知症予防が議論されつつあることに、注意が必要のように思われます。

わが国には、高齢化の進行とともに、人口や働き手の減少、介護人材の不足、外国人労働者への期待など、多くの課題があり、これらを社会保障費の抑制で乗り切っていくこうとする政策動向があります。この延長線上に認知症削減の数値目標があるとすれば、事態は厳しいものにならざるを得ません。

「認知症の人と家族の会」（以下、家族の会）は当事者グループであり、社団法人を結成し、本部を京都に、すべての都道府県に支部を置いて活動しています。家族の会はお互いの情報交換や電話相談、講習会等を行い、悩みを分かち合い、励

ましあつてきました。家族の会は、孤立している家族を支え、社会的な理解を広げ、国際交流を行い、全国的な研究集会を開くなど、重要な活動を展開しています。

政府は新オレンジプランを強化するため、近く大綱をまとめ、そこに認知症の人の割合を減らす数値目標を入れるとしておりましたが、家族の会をはじめとする当事者の反発から取り下げました。科学的な根拠が確立していないなかで、「予防の努力が足りないから認知症になる」と言うような偏見を生んではなりません。

昨今の財政的な要請・都合で、上から認知症の削減目標が決められるようであれば、誰のための、何のための「予防」なのか分からなくなりそうです。当事者の声、家族の会の意見を何よりも大事にすべきだと思えます。

（社会福祉法人  
サンシャイン福祉振興会理事長・  
聖隷クリストファー大学  
大学院教授）  
大友信勝

文芸コーナー



ひなげしや今日退院の母を待つ  
木苺をもちだあの日も遠くなり  
康子

遠山にゆれる銀色朴の葉は  
わが勤め保健指導に六十年  
この身にしてみてもか百寿を生きる  
百才杖人

背に汗を感じてさがす夏のシャツ  
僕の鯉友達集まり黒川泳ぐ  
きてくれて微笑みました軒ツバメ  
宮豆

飛魚の羽がほしいとダダこねる  
飛魚の羽のかりたき胸内  
千枝

見なれたる景色なれども初夏が好き  
友と憩いし一時のよし  
今聞いて今を忘れる齢でも  
嬉しいことは心に残る  
秀子